

モーリス・ブランショと時代——「来たるべき書物」から「書物の不在」へ

西山 雄二

0. モーリス・ブランショ (Maurice Blanchot, 1907-2003)

文学、思想、政治といった領域に関与しながら、20 世紀を丸ごと生き抜いた人物
生涯を通じて肖像写真を公開しなかった「顔のない作家」
書く行為、書かれたテキストを通じてのみ公的であった人物

- ① ジャーナリスト：1930 年代に『ジュルナル・デ・デバ』『城砦』『蜂起』『闘争』といった右派の新聞や雑誌に国粹主義的な政治時評を発表し、議会主義や資本主義、ヒトラー主義、共産主義など当時の既成の主義主張を舌鋒鋭く拒絶する非順応主義的な立場を貫いた。
- ② 作家：死ぬことの不可能性がもたらす軽やかな厚みとでも形容しうるような空間を独特の撞着語法を用いて描き出した。『謎の男トマ』(1941 年。新版 1950 年)、『死の宣告』(1948 年)、『期待 忘却』(1962 年)、自伝的物語『私の死の瞬間』(1994 年) など。
- ③ 批評家：マラルメとカフカの作品を絶えざる参照軸としつつ、文学を、言語活動と死が直交する地点でなされる不可能性の経験とみなす、戦後フランスを代表する批評家。『文学空間』(1955 年)、『終わりなき対話』(1969 年) といった評論集。
- ④ 思想家：バタイユとレヴィナスの思想をつねに意識しながら、ヘーゲルとハイデガーの哲学を踏まえつつも、両者から逸脱する思考を展開。ヘーゲルのいう弁証法の契機とはなりえない〈否定的なもの〉を、ハイデガーのいう〈存在〉とは異なる〈中性的なもの〉を思索。フーコー、デリダ、ナンシーらに影響。
- ⑤ 政治的な活動に身を捧げた人物：1958 年から 68 年まで、アルジェリア戦争から五月革命に至る期間、マスコロやデュラス、アンテルムとともに、大統領ド・ゴールの政治体制に対する執拗な抗議を続ける。知識人の特権性を徹底的に排しつつ、「121 人宣言」の起草、『国際雑誌』の企画、「学生 - 作家行動委員会」の活動といった集団的な文学実践を通じて、「エクリチュールの共産主義」を模索。

→ 多種多様な執筆形態を経験：日刊紙、週刊誌、書物、宣言文やアピール文、ビラやパンフレット、同人誌、断片集。

1. 文学空間の可塑性——言語と死が直交する地点でなされる不可能性の経験

1) 「本質的孤独」

作家の現実の生き様とその創作作品は切り離されていて、両者はいかなる特権的な関係をもたない。

「我を読むなかれ」という厳しい表現が、いまだ一冊の書物しかないところに、ある別の力をもった地平をすでに出現させている。直接的ではあるが、とらえどころのない経験だ。それは禁止の力ではない。語の働きと意味を通じておこなわれる執拗で容赦のない、胸を指すような断言である。ある決定的なテキストが余すところなく現存するなかで存在するものが、しかしながら自らを拒絶し、拒絶の容赦のない厳しい空虚さであり、そのテキストを書いたあとこれを読み、新たに把握し直そうとする者を無関心の権威 [l'autorité de l'indifférence] でもって排除する、という断言である (EL17/13)。

「書物 (livre)」：書き記された文字の集積に作家の署名が付されることで、書物は作家によって権威づけられ、輪郭のある形で完成する。

「作品 (œuvre)」：作品とは書物が書物足りうるための要件であり、書物の中核をなすのは「作品が存在する [l'œuvre est]」地点だとされる。

≠ フォルマリズム批評

作者はテキストの創造者ではなく、テキストの分類ラベルにすぎない。テキストを分析され解釈されるべき客観的な資料体。作者との関係が無化されることで、テキストは別の作者や作品、異なる文化的コンテキストとの関連において分析される。

→ ブランショは文学の本源をなす「作品」が客観的な仕方で現存するとは考えない。「作品」はすでに確固た

る姿で現存しているのではなく、書くことと読むことの経験を通じて、つねに探求されるべきものとしてのみ存在する。

文学の可能性／不可能性の条件

「文学とは何か？」(サルトル)ではなく、「いかにして文学は存在するのか？」と問い続けること。

「文学はいかにして可能か？」(FP92/112)；「文学はどこから始まるのか？」(PF73/86)；「文学はどのような状態にあるのか？」(EL322/341)；「文学はどこに行くのか？」(LV265/301)；「芸術や文学とどのような何ものかが存在するのならば、そのことによって何が賭けられているのか？」(EI VI)

文学の本質規定に関する問いを回避して、文学の存在可能性およびその不可能性をその限界上で問いたす。「文学の形而上学」≠文学における多様なジャンル性、書き手の意図や情動、書かれたものに刻み付けられた作家の身体的律動

2) 言語と否定性

具体的なあらゆる対象は言葉によってその実在性からを駆り出され、言葉のうちで非実在と化す。実在する「この花」はその現実性を剥奪されて、「花」という言葉のなかで永遠化される。

「死を担い死のなかで保持される生」(ヘーゲル)：現存する諸事物は言葉を通じて不在と化す、つまり、諸事物が自らの死を保存することによって言葉として生き延びる。

ブランショの言語観——不在の現前

言語を事物の個別具体性が観念化される営みとみなすのではなく、言葉と化した物の不在が存在するという罅にとどまること。文学によって、物の世界からも人間の世界からも切り離されると同時に、その両者とも隣接する中立的な領域が新たに生み出される。「すべてが消え去った」の現われ。

「言語とは主体のない一種の意識であり、存在から隔てられた分離状態であり、異議申し立てであり、空虚さを創造し、欠如のなかに身を置く無限の力である」(PF48/52)。

→文学は二重の不在として存在する。書く経験において、作家は事物と観念化作用の二重の不在に曝される。

3) 私の死の可能性／死ぬことの不可能性

ハイデガー哲学における死：他の「現存在」と取り替えることができない死は、各々の「現存在」にその「本来性 (Eigentlichkeit)」をもたらす「もっとも固有な可能性」

「死とは現在の深淵であり、私が何の関連ももちえない現在なき時間であり、私がそれに向かって跳躍することのできないものである。なぜなら、死のなかで私は死なず、死ぬ能力を失っているからだ。死のなかでは、ひとが死ぬのであり、死ぬことを止めず、死をなし終えることもないからである」(EL202/215)。

≠エピクロス表現：「私たちが存在する限り死は存在せず、死が現に存在するとき、もはや私たちは存在しない」。生と死の二分法、死に対する不可知論的な態度。

→ブランショは峻別された生と死ではなく、生と死が振れた位相をひたすら注視する。「死という言葉を否定なしに読むこと」(リルケ)。死の瞬間に〈私〉が到達すべき「私の死」は「ひとの死」へと二重化される。「私は死ぬ」という〈私〉のかけがえのない能力は、「ひとが死ぬ」という〈私〉の不可能性によって異議申し立てを被る。

4) 文学空間＝死の空間

① 非人称性

文学における書くことと読むことを通じた非人称的経験

文学がもたらす「誰でもよい誰か」という他者性の経験は世界からの離反を引き起こす。

≠日常的な自我とは異なる創作する自我、芸術家の奥底の内的現実を物語る「第二の自我」(プルースト)

② 無際限さ

始まりと終わりのある「書物」≠「再開始の非決定性が支配する時間」(EL18/14)に委ねられる「作品」

③ 可塑性

「私たちは作品がもつもっとも本来的なものとして語調トーンに敏感であり、作品を通じてその語調に感嘆するとき、これは何を意味するのだろうか。それは文体ではなく、言語がそその興味関心や言語の質でもなく、明らかに、こうした沈黙であり、こうした雄々しい力である。書く者は自己を喪失し、自己を断念してはいるが、この力によって、こうした消失状態にありながらも、ひとつの能力をもつ権能、沈黙する決断を保持してきた。それは、こうした沈黙のなかで、始まりもなく終わりもなく語るものが形態をとり、一貫性を持ち、聴解されるためである」(EL22/19)。

事物が言葉のなかで沈黙と化していく語調トーンが作品において聞き取られるべく残される。

だが、そもそも、文学の可能性の中心たる「作品」はいかにして「書物」という「形態」や「一貫性」を獲得するようになるのか。書き手は沈黙それ自身がいかなる形を必要とし、いかにして自ら生成してくるのか、その可塑的な到来に耳を澄ますことを強られる。

→作品の創造は歴史のなかに不動の真理を打ち立てるような業ではなく、自らの権威を放棄しつつ、「作品」と「書物」のあいだの造形的な運動に自らを曝す経験。作家の言葉は神の御言葉ゴゴエではない。

作品と歴史

「作品は、それがたんに研究や興味の対象でしかないような場合でも、他の生産物のあいだで産み出されるわけではない。この意味で、作品は歴史をもたない。歴史は作品を専念しないで、作品をして占有物にする。だが、作品とは歴史であり、ひとつの出来事であり、歴史の出来事そのものである。そして、この出来事が起こるのは、そのもっとも断固たる主張が端初という言葉にそのすべての力を与えるからである。」(EL 303-304/322)

5) 中性的なもの (le Neutre)

レヴィナスの表現〈ある (il y a)〉: 〈私〉が定立される以前の非人称的な位相。

〈ある〉はいかなる事物も自我も消滅した、本質的に無名の場として規定され、出口のない恐怖とされる。

〈ある〉の融即状態を中断させ、〈ある〉から脱出し、〈私〉の実存を定位しなければならない。

ハイデガーとレヴィナスを念頭に置くブランシヨの批判:

「明らかに不当な単純化ではあるが、「中性的なもの」を非人称的なものの法や普遍的なものの支配に置き換えることでこれを馴化したり手懐けたりするための努力にしる、〈私 - 主体〉の倫理的優位、特異な〈唯一的なもの〉への神秘的な渴望を肯定しつつ〈中性的なもの〉を忌避するための努力にしる、哲学史全体を通じて何らかの努力を認めることができるだろう」(EI441)。

ブランシヨの眼からすれば、〈中性的なもの〉は我有化されるべき位相でも、そこから抜け出すべき位相でもない。〈中性的なもの (le Neutre)〉こそが文学の非人称的な力の場をなしているのであって、主体化の運動によってその無名性を解消することはできない。

〈中性的なもの〉 ≠ 否定的なもの、不在のもの

＝その語源「ne uter」通りに「一方でもなく他方でもなく」という運動性

複数の表現とニュアンスによる〈中性的なもの〉の動態の活写:

「外 (dehors)」「異他性 (étrangeté)」「未知なるもの (inconnu)」「あいだ (entre-deux)」「外在性 (extériorité)」「中断 (interruption)」「距離 (distance)」「空虚 (vide)」、そして晩年には「災厄 (désastre)」。

6) 20 世紀を生きた文学者ブランシヨの意義

人間の限界経験の探究

西洋の哲学的伝統において、「言葉を話すこと」と「死ぬこと」は人間を規定するもっとも本質的な要素とみなされてきた。

人間は「言葉をもつ動物」:ゾーオン・ロゴン・エコーン 鳴き声や叫び声によって快・不快を表出するだけの動物とは決定的に異なる。

人間は死すべき存在: 自らの死の到来をあらかじめ自覚することで生に意味を付与しうる。

ブランシヨの言語と死の原理的な考察は狭義の文学論にとどまるのではなく、人間存在を根本的に思考し直す射程をもつ。

ブランシヨの抽象性と具体性

- 1) ブランシヨの文学作品はたんに簡潔で省略的なだけでなく、独特の抽象の力をもつ。
Cf. 國分功一郎「抽象性と超越論性——ドゥルーズ哲学の中のブランシヨ」『思想』2007年7月号
「[ブランシヨは] 死の二重性という重要な概念を提示した。だが、彼はその二つの要素の異質性をただひたすら主張して終わった。」「抽象性のなかを極限まで滑り切った」ブランシヨに対して、ドゥルーズはブランシヨの議論を精神分析や出来事概念へと外挿することで、超越論的なものの生成まで思考した。
- 2) ブランシヨの具体性——時代と共に歩むブランシヨ
 - ・30年代のジャーナリストの経歴：政治時評の連載
 - ・文芸時評の連載：「新フランス評論（NRF）」誌での連載など。
 - ・小説作品、物語作品の創作：個別具体的な事象の記述。

2. ブランシヨの政治参加と文学の可塑性の探究（1958-1969年）

1) ド・ゴール政権に敵対するブランシヨ

a) 「本質的倒錯」（アルジェリア戦争期のド・ゴールの政権復帰）

1958年10月、混乱するアルジェリア情勢の解決のために、ド・ゴール将軍が政権復帰。ブランシヨによる分析「本質的倒錯」『七月一四日』誌第3号（1959年6月18日刊行）。ド・ゴールがフランスが植民地戦争を切り抜けるための「摂理を体現する人物」に。政治権力を掌握した人物が「宗教的な救済者」となり、「権威的でありながら権威を欠いた体制」（EP24/30）を確立。「その人格への敬意からではなく、彼が体現するあの非人称的な力への敬意から、彼が肯定しなければならぬ至高性は最低限の行動とのみ合致するという感情によって」（EP16/21）、ド・ゴールは政治的主導権を獲得した。

「これは独裁だろうか。いや、違う。独裁とは、権力のために闘争して、きわめて個人的なその人格のまわりに権力を集中させるひとりの個人に渡される力のことである。なるほど、それはいささかも良いものではないが、とはいえ、思考にとっていささかも不安なものではない。独裁は人間的な権力であり、独裁者は誰の目にもそれと分かる人間であり、その体制は制約のない力の行使なのである」（EP15/20）。

b) 「政治の死（mort politique）」の告発（六八年五月の出来事）

① ド・ゴールが街路から自由を奪ったことに対する批判

7月14日の革命記念日を前にして、ド・ゴールは「街路では金輪際何も起こってはならない」と宣言
→ ブランシヨはこれを「政治の死の発令」と批判。

・「日常の言葉」（1962年）

街路は出来事を欠いた空間、それゆえ、「日常を生きているのは誰なのか」という問いかけがつけねに付き纏う空間。→しかし、ド・ゴールは主体を欠いた「何も起こらない」場である街路に対して、体制側が主体的に「何も起こってはならない」と権威的に命令を下す。

② ド・ゴールによって蔓延した政治的なニヒリズムへの批判

「私たちが彼と共有する生きながら死んだ状態（notre état de mort-vivant）」（EP 110/165）

l'état de mort-vivant：「瀕死の状態」、「生ける屍」、「処刑を間近に控えた死刑囚の状態」

「生きながら死んだ状態」：文学創造の条件をなすもの。この位相においてこそ誰にも我有化されることのない非人称的な言語活動が展開される。

政治の死を遍在させるド・ゴール大統領は、その「生きながら死んだ状態」、すなわち、ブランシヨ自身の文学者の条件にしたがって、非人称的な政治空間と言語活動の可能性を抑圧している。

→「愛想よく見えるためにいっそうおぞましいひとりの敵」（EP 105/160）

2) 「来たるべき書物」から「書物の不在」へ

a) 「アルジェリア戦争における不服従の権利宣言」（通称「121人宣言」）

大義のないアルジェリア戦争に徴兵される若者の脱走や逃亡を支持するために1960年9月6日付けの『ル・モンド』紙で発表された宣言文。

サルトル、ボーヴォワール、デュラス、モーリス・ナドー、フランソワーズ・サガン、シモーニュ・シニョレなど、121人の左派系著名人の共同署名。

ディオニス・マスコロやジャン・シュステール、ブランシヨらが起草。

知識人たちが書き記した、第二次世界大戦後のフランスでもっとも名高い文書のひとつ。

末尾の宣言文：「われわれは、アルジェリア人民に対して武器を取ることの拒絶を尊重し、正当と考える」
「われわれは、フランス人民の名の下に抑圧されているアルジェリア人たちに援助と庇護を提供することを自分の義務とみなすフランス人たちの行動を尊重し、正当と考える」「植民地体制の破壊に決定的に寄与しているアルジェリア人民の大義は、すべての自由な人々の大義である」(EP31/39)

知識人の共同宣言の効果

サルトルを筆頭に著名人たちが互いの合意と宣言内容の承認を経てひとつのテキストを公表する。文書には署名者たちの意志が刻印されているため、複数の署名は宣言文の社会的効果をよりいっそう倍加させる。宣言文は数多の知識人によって発案され、彼らの名のもとに権威づけられ、彼らの意志を公衆に訴える。

1960年12月2日付けのサルトル宛のブランシヨの手紙

「知識人の言葉には決断の力があり、この力に対して、彼ら自身は、たんなる責任感というものよりもはるか彼方へと向かうべく定められた運動によって応じなければなりません」(EP46/59)。

→知識人の高名さが社会的効果をもたらすのではなく、むしろ、名の権威とは次元を異にする宣言文の存在に力点がおかれる。「121人宣言」が「数々の名前による、ある種の無名の共同性」(EP46/59)となること。

文学と政治

「自分がこの文書に署名したのは作家としてであるけれども、政治的な作家としてでも、政治闘争に参加した市民としてでさえなく、自分に本質的に関係する数々の問題に関して見解を明らかにするに至った非政治的な作家としてなのです」(EP37/49)。

b) 『国際雑誌』の試み(1960-64年)

ブランシヨの発意によって1960-64年に準備作業がなされた、共同での文学的創作の試み。

フランスからはマスコロやデ・フォレ、ロベール・アンテルム、モーリス・ナドー、ロラン・バルトラ、ドイツからはエンツェンスベルガーやウーヴェ・ヨーンゾン、イタリアからはエリオ・ヴィットリーニやイタロ・カルヴィーノらが参加。

1961年のベルリンの壁の建設によってドイツ側との交渉が難航、雑誌に対する見解の相違が仏独伊の編集部間で顕著に¹。結局、この雑誌はイタリアの雑誌『イル・メナボ』のなかで第〇号が公開されただけ。

ブランシヨの指針

① 世界の現状を反映させるために、書物ではなく雑誌という形態を選択

ブランシヨは、「ベルリンの壁」や「キューバ危機」などによって東西冷戦が激化する状況のなかに「時代の変化と呼べるような極限運動」(EP50/69)を認めていた。周期的に刊行される雑誌形態をとり、これが政治から芸術まで主に短い時評によって構成されることで、実社会の時間の流れに対応する表現形態が探し求められる。

② 共同創作のために断章形式の可能性を模索

断片的な短いテキストを配することによって、多種多様な対話の空間が開かれ、書き手の特権性が後景に退くことが期待される。

→「時代の変化」への現実的な準拠と作家の特権性の消去が生み出す奇妙な隔たり。

『国際雑誌』はたしかに作家が政治的な意見表明をおこなう場なのだが、しかし、「この雑誌があるがままの政治的現実に関心を向けるのは、直接的ではなくつねに間接的にである」(EP58-59/75)。

「包括的であると同時に具体的な責任であり、本性としてマルクス主義と真実の方法としての弁証法とを受け入れる政治的責任と、文学のなかで文学によってはじめて形をなしうる要請に対する答えとして

¹ 『国際雑誌』の失敗に関するバルトの印象的な証言。「準備のための集会在何度もあったのですが、どの集会でもいつも、ブランシヨから発せられる運命……のようなもの、否定的な宿命のようなものに強く印象づけられました——しかし、それはとても美しいけれど、少し怖いものでした——」(『新たな生の方へ ロラン・バルト著作集10』石川美子訳、みすず書房、2003年、231頁)。

の責任である文学的責任とのあいだに、還元不可能で、調和さえとれない差異が結果として生じるように思われる」(EP56/71-72)。

現実の「政治」が直裁的に語られるのではなく、文学の新しい形態の模索を通じて「政治」が別の仕方で語られ、そうすることで現実を変革するための「政治的なもの」が指し示されることを期待。

文庫本という形態への疑問

ブランショは、フランスにおける文庫本の創刊²を取り上げて、文学や芸術作品が巨大な情報産業の商品と化していく現状に危惧を表明。文庫本の特徴≠価格の安さ
文化の体系的な意味づけ：ポケットサイズの文学を入手することで、すべての人々が文化に触れることができ、文化の総体がすべての人に提供されるという意識。

「作品が有する還元不可能な距離は […] 幸福感をとまなう親しみやすさとともに、ありうべき知や口に出すことのできる言語といった尺度へと還元される」(A84)。

諸々の文学作品を包括的な地平のうちに取り込む「文化」≠ブランショが探求する「文学」

「文学とはおそらく、本質的に(私は「唯一」とも「明白に」とも言うまい)異議申し立ての力である。それは、既成権力への異議申し立て、存在するものへの意義申し立て、言語への、文学言語の諸形式への異議申し立て、そして、権能としての意義申し立てそれ自体への異議申し立てである」(A80)。

c) 学生作家行動委員会での活動(1968年)

1968年5月から12月(いわゆる「五月革命」)、ブランショは文芸批評テキストの執筆を一切中断し、匿名あるいは共同執筆の形で政治的テキストを作成。『ル・モンド』紙などに掲載された共同アピール、デュラスやマスコロらとともに結成したピラ、小冊子『コミテ』など。

無名性 - 断片性 - 共同性という三幅対が生み出す運動

① エクリチュールの無名性

書くことによって作家が自分固有の特徴を剥ぎ取られ、もはや「私」という発話が意味をなさなくなるほどに非人称的な「ひと」と化すこと＝文学の本源的経験

「だが、作家は無名性をきわめて必要とするのではないだろうか。友の顔や感受性と親しい関係を保ちながら書いていると思いついでいる場合、彼は幻想を抱いているのではないだろうか」(LV136/153)。

「無名をめぐる無益な闘争。非人称性は無名というものを保証するのに十分ではない」³(PAD53)。

「非人称性(impersonnalité)」という措辞のなかにある「個性＝人格(personne)」をよりいっそう警戒。頭名のなかでこそその無名性が作用し、他者を自らのうちに導き入れる。〈五月〉の喧騒を経て、ブランショは、〈私〉が非人称的な空間へと消失していく運動ではなく、あらゆる名が名の欠如と共鳴し、ざわめくありさまを強調するようになる。

② テキストの断片性

1958年のテキスト「期待」⁴で初めて断片形式での執筆(後に『期待 忘却』に収録)。評論集『終わりなき対話』(1969年)において断片的な書き方が試みられる。

断片と全体

断片形式のテキストは通常、何らかの全体や体系との関係において意味をもつ。例：全体像が消失した後で残された古典古代の断片テキスト。ひとつの作品として統合されないまま、無秩序な配列で残された断片テキスト。過去の破壊から残されたものにせよ、将来の完成を目指すものにせよ、断片テキストは〈全体〉との関係のなかで読み解かれる。

² フランスで文庫シリーズ「Livres de Poche」が創刊されたのは1953年2月。以後、1962年に「10/18」シリーズやGallimard社の「Idées」シリーズが、1964年には「Garnier Flammarion」やSeuil社の「Points」シリーズなどが刊行される。ドイツのレクラム文庫が1867年、岩波文庫が1927年、イギリスのペンギン文庫が1935年、アメリカのペーパーバック・シリーズが1939年に創刊されていることを考えるとフランスにおける文庫本形態の普及はかなり遅い。

³ これはヘーゲルの「承認をめぐる闘争(la lutte pour la reconnaissance)」を意識した表現である。

⁴ « L'attente », *Botteghe oscure*, n° 22, 1958.

アフォリズムと個別

「aphorisme (警句)」<ギリシア語原義「aphorizein (地平を区切る、限定する)」
「警句とは限定し、閉じ込める力である。地平——自らに固有な地平——の形をした形態である」(EI228)
警句はそれ自身で完結した形態によって自立した意味を備えている。警句はそれ自体で独立した全体を形づくり、全体という観念と密接な関係をもつ。

断片的なもの＝文学の存在様態

ドイツ・ロマン主義：全体や体系という思念に対して断絶や中断を導入。
ニーチェ：首尾一貫した哲学的ロゴスとはまったく異なる表現を模索するために、断片という新しい言語表現を創出⁵。

断片は不完全な形態であるがゆえに、別の断片へと開かれている。断片の総体はひとつの閉じた作品ではなく、至る所に断絶や間隙が刻み込まれた流れ。

「まったく別の言語、全体の言語ではなく、断章、多元性、分離の言語」(EI228)
断片的なテキストは、「何かを構成するのではなく、並置するような配置状態。すなわち、交流をもつ諸項を互いに外部へと委ねたままにし、この外在性や距離をあらゆる意味作用の原理——つねにすでにその役割が免じられる原理——として尊重し、保存するような配置状態」(EI453)におかれる。
断章形式≠ひとつの文学的ジャンルやスタイル。
断片的なものこそが、文学の存在を体現するのであり、あらゆるジャンル区分に異議を唱える。ひとつの書物という総体に収斂することのない、脱中心的なエクリチュール。

③ 無名の書き手と断片的なテキストが織り成す共同性

諸断片のあいだに数々の異質な力線が混在することで、それらが互いに結合し接続し、あるいは、離反し競合したりすること。

単数から複数へ、〈一〉から〈多〉へという集団性ではなく、計算可能性の論理とは相容れない、無名的かつ共同的事であることが要請される。

d) 「書物の不在」

1969年4月、約1年ぶりの文芸批評テキスト「書物の不在」

同じ年に出版された評論集『終わりなき対話』の巻末に配される。

『終わりなき対話』の巻頭の注記では「私たちはいまだに書物の文明のなかにいる」ことが確認され、「統一に従属した秩序をつねに指し示す」〈書物〉が批判的に検討される。収録された諸テキストのいくつかはその結尾に断片的テキストが新たに追記されることで、文章の流れが断片化され、散在しながら中断されるように仕掛けられている⁶。

『コミテ』誌の「ピラ・ステッカー・パンフレット」という断章：

「書物は消滅しなかった、それは認めよう。しかし、私たちの文化の歴史において、そして肩書きのない歴史一般において、エクリチュールを書物にではなく書物の不在に絶えず差し向けてきたすべてのものは、つねに動揺を告知し、準備してきたのだと言っておこう」(EP119/177)。

「私たちが断絶のもたらす動揺と結びついている限り、もはや書物などいらない、金輪際書物などいらないのである」(EP120/178)。

⁵ ニーチェの断章形式へのブランシヨの接近は、1960年代フランスのニーチェ受容の文脈と関係している。イタリア人哲学者コリとモンティナリの緻密な文献学的分析により、『力への意志』なる「作品」が存在せず、1880年代のニーチェの断片テキストは未完成で、しかもニーチェ自身がその作品化を望んでいなかったという事実が確証されたのだ。『力への意志』は文献上の操作によって事後的に創造されたもので、実際は、日付や出所の異なる約四百もの断片的なテキストが残されていただけだった。その結果、閉じた〈体系〉や〈作品〉を解体し、序列化されていない、互いに同等の価値をもつ「間テキスト」的な諸断片といった意義がニーチェの晩年の思想に認められるようになる。

⁶ この時期ブランシヨを理想としていた若きフーコーは、ドゥルーズと共同執筆したニーチェ全集第五巻の「概括的序論」で、コリとモンティナリの研究と編集の成果を称賛しつつ、次のように結んでいる。「私たちが希望するのは、ニーチェが遺すことのできたメモ、およびそれらの多様な構想が、読者の目に対して、組合せと置き換えのすべての可能性を解き放つことである。これらの可能性は、ニーチェに関して「来たるべき書物」という未完の状態をいまや永久に含みもっているのである」(「概括的序論」『ミシェル・フーコー思考集成II』所収)。ニーチェの断片群がもたらすであろう思想的宇宙を指してフーコーが「来たるべき書物」と名づける一方、ブランシヨは、書物という形態に見切りをつけ、断片的エクリチュールが「書物の不在」を目指すとする。フーコーとブランシヨが文学空間の可塑性をめぐって興味深いすれ違いをなす場面である。

「書物を書く技法ははまだ見い出されていない」(ノヴァーリス)

ブランシヨは今度はひとりで断片の手法を実践し、断片集『彼方への歩み』『災厄のエクリチュール』を著すことになる。

異議申し立てとしての文学の探究

「文学が表象しているのは、可能性というものにはおそらく依拠していない一種独特な力である(ところで、可能性だけが弁証法と何らかの関係をもつ)。すなわち芸術とは、無限の異議申し立てであり、それ自身の異議申し立て、および他のあらゆる形をした力への異議申し立てなのだ——そしてこのことは、たんなる無秩序においてではなく、芸術と文学とが表象する独特の力(権力なき権力)の自由な探求においてなされるのである」(EP55/70-71)。

〈引用文献〉 略記号を用いて使用した版の原書と日本語訳書の頁数をそれぞれ示すことにする。波線強調は引用者。

Maurice Blanchot,

FP : *Faux pas* (1943), Gallimard, 1975. 『踏みはずし』 栗津則雄訳、筑摩書房、一九八七年。

PF : *La Part du feu* (1949), Gallimard, 1993. 『完本 焔の文学』 重信常喜・橋口守人訳、紀伊国屋書店、一九九七年。

EL : *L'Espace littéraire* (1955), Gallimard, coll. « folio essais », 1994. 『文学空間』 栗津則雄・出口裕弘訳、現代思潮社、一九九〇年。

LV : *Le Livre à venir* (1959), Gallimard, coll. « folio essais », 1986. 『来るべき書物』 栗津則雄・清水徹訳、筑摩書房、一九八九年。

EI : *L'Entretien infini* (1969), Gallimard, 1995.

A : *L'Amitié* (1971), Gallimard, 1995.

PAD : *Le Pas au-delà* (1973), Gallimard, 1992.

EP : *Écrits politiques 1958-1993*, Lignes & Manifestes, 2003. 『ブランシヨ 政治論集 1958-1993』 安原伸一郎・西山雄二・郷原佳以訳、月曜社、二〇〇五年。